

公益財団法人 大阪市博物館協会・公立大学法人 大阪市立大学 包括連携協定企画

シンポジウム 秀吉の三都

大阪市立大学と公益財団法人大阪市博物館協会は、包括連携協定に基づき、大阪市博物館協会所属の博物館等の学芸員と本学の教員とが、人文科学・自然科学分野を対象とし、共同研究や教育を行っています。

今回包括連携協定企画として、平成30年1月8日（月・祝）大阪市立大学杉本キャンパス・田中記念館ホールにて、シンポジウム「秀吉の三都」を開催しました。また本シンポジウムは本学大学院文学研究科の仁木教授が研究代表を務める科学研究費補助金・基盤研究A「中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究」の成果の一部を報告するものでもあります。

当日は荒天にも関わらず300名を超える方々にご受講いただきました。

プログラム

・第1部 講演会

- 1.豊臣期首都論
- 2.秀吉の城下町の形
- 3.秀吉の城郭構造
- 4.日本の中の「三都」

・第2部 ディスカッション

豊臣政権にとっての「三都」の意義。
その中での大坂の役割。



▶ 会場の様子

第1部 講演会

1.豊臣期首都論：谷 徹也（京都大学大学院文学研究科助教）

秀吉が権力を掌握していくプロセスを追いつつ、多くの史料を使用し、その時々を整備した各首都（大坂、京都（聚楽第）、伏見（指月城、木幡山城））の性質を分析しました。

谷氏▶



2.秀吉の城下町の形：松尾信裕（大阪歴史博物館学芸員）

信長の時代から多くの城下町を、地籍図や発掘調査の結果をもとに分析。その中で町人職人の住まう町人地に着目し、町人地の形が全国的流通ネットワークの発展により変わったことを指摘、各城下町個々のケースについても紹介しました。



▲松尾氏

3.秀吉の城郭構造：中井 均（滋賀県立大学人間文化学部教授）

秀吉の築城した大坂城、聚楽第（京都）、伏見（指月城、木幡山城）について、古絵図や発掘調査の結果に基づき、城郭構造を総合的に分析。政治的・軍事的といった都市の性質が、その構造にもあらわれていることを解説しました。

▶中井氏



4.日本の中の「三都」：仁木 宏（大阪市立大学大学院文学研究科教授）



◀仁木教授（本学）

16 世紀の日本において社会の本質的な変化があったことを踏まえて、豊臣期の大坂、京都（聚楽第、伏見）の役割、位置を見直し、とりわけ全国の流通の拠点へと成長した大坂について説明しました。

第2部 ディスカッション

本学大学院文学研究科・仁木教授の司会のもと、第1部で報告した講師たちが再度登壇、互いに質疑応答を行う形で進められました。

専門の異なる各講師たちの議論は、秀吉の整備した三都の城と城下町について総合的に考える機会となり、受講者の方々の理解も深まりました。



▶ディスカッションの様子

受講者アンケートより

- ・どの講演においても様々の視点から深く考察されており、新しい発見を得られました。またこのような機会があればぜひ参加したいと思います。（30代・女性）
- ・4人の先生方の発表はそれぞれ大変知的に刺激的でした。秀吉の「三都」はもちろん、その他の地方の城郭を実際に見る際に先生方の指摘された視点で見たいと思いました。（70代・男性）
- ・都市大坂を誰が掌握するのが重要だったとの考え方、本当にそうだと共感しました。秀吉の構想した都市は住みやすく、活気があり、天下の台所として繁栄している様子をこんな風に解説していただけるととても良く分かります。（50代・男性）